

ミニ展示

関東大震災と富士見

2023年 9月1日(金)～10月1日(日)

大正12年(1923)9月1日正午直前、関東大震災が南関東一帯を襲いました。家屋の倒壊に加え、火災などの二次被害も甚大なものとなりました。死者は9万1000人弱、行方不明者1万3000人、全壊・半壊家屋が各17万5000戸強といわれています。

震災の直後から新聞、雑誌、画報、絵葉書といった当時の様々なメディアで報道されました。今回、展示する『大正大震災大火災』は同年10月1日に現講談社から発行された冊子で写真と文章で震災とその後の火災の様子、逸話が掲載されています。また『主婦の友』も同様に震災の様子を紹介しています。

なお、これらは市内の家で保存されていたものです。

埼玉県下でも、東京に隣接する川口・浦和・粕壁などで大きな被害がでています。富士見市域の三村でも被害が発生しています。その記録も今回展示する「水谷村郷土調査」、その他「南畑村郷土調査」、当時の村の行政文書に残されています。被害の他に例えば、東京に依存していた下肥の替りに自給を図るよう奨励する文書、震災直後の混乱時に出された流言飛語に関する文書も残されています。

また市域三村では被災者の救援活動も行いました。第一に義援金募集が村役場を通じて村民に対して行われました。第二に、村の出身者で避難してきた人、村の縁故者を頼ってきた人に対する村の救援活動があります。村では罹災者の子どもを小学校へ入学させるなどしました。

このように市域三村にとっても震災は他人事ではない事態でした。



『大正大地震災大火災』

1923年10月1日、大日本雄弁会講談社編・発行。60ページ前後の写真と、300ページを超える文章からなる。全国で数十万部売れたという。

『主婦の友 東京大震大火画報』

1923年10月、主婦の友社発行。内容については目次(下の写真)参照。こちらも写真より体験談などの記事が多数を占める。



第一一六六号

大正十二年九月二十五日

水谷村役場

第四区長

村田竹三郎殿

自給肥料ニ関スル件

今回稀有ノ大災害ニ依リ輸送機関ノ不備在庫
品ノ焼失并ニ東京市内糞尿供給ノ不足等ニ伴ヒ
冬作肥料ハ或ハ缺乏ヲ免レザルヤニ察セラレ候ニ付其對
應策トシテ此際自給肥料ノ増加ヲ計ルハ最モ機宜
通シタルモノト被存候旨其筋ヨリ通牒ノ次第モ有之
候ニ付左記事項ニ留意シ各地ノ事情ニ鑑ミ之ガ利
用上遺憾なき様貴区内ノ当業者ニ周知方御
取計相成度此段及御依頼候也

記

- 一、堆肥、厩肥ノ生産増加ヲ計ルコト
- 一、家畜糞殊ニ鶏糞蚕糞等ノ取扱ニ注意シ之ガ利用ヲ計ルコト
- 一、原野、堤塘、畦畔等ノ草類山林ノ下草等差支ナキ限リ利用スルコト
- 一、塵埃、泥土、藻類等ノ利用ヲ計ルコト

第一一六六号

大正十二年九月二十五日 水谷村役場

第四区長

村田竹三郎殿

自然肥料ニ関スル件

今回稀有ノ大災害ニ依リ輸送機関ノ不備在庫
品ノ焼失并ニ東京市内糞尿供給ノ不足等ニ伴ヒ
冬作肥料ハ或ハ欠乏ヲ免レザルヤニ察セラレ候ニ付其對
應策トシテ此際自給肥料ノ増加ヲ計ルハ最モ機宜
通シタルモノト被存候旨其筋ヨリ通牒ノ次第モ有之
候ニ付左記事項ニ留意シ各地ノ事情ニ鑑ミ之ガ利
用上遺憾なき様貴区内ノ当業者ニ周知方御
取計相成度此段及御依頼候也

記

- 一、堆肥、厩肥ノ生産増加ヲ計ルコト
- 一、家畜糞殊ニ鶏糞蚕糞等ノ取扱ニ注意シ之ガ利用ヲ計ルコト
- 一、原野、堤塘、畦畔等ノ草類山林ノ下草等差支ナキ限リ利用スルコト
- 一、塵埃、泥土、藻類等ノ利用ヲ計ルコト

自給肥料ニ関スル件 (村田茂次家文書)

震災により下肥や化学肥料の流通が打撃を受けたので、堆肥や草はもとより、鶏糞、カイコの糞、塵埃(ゴミ)なども活用して肥料を自給するよう促した。

『郷土調査』に記録された震災

昭和4年(1929)頃、全国で、郷土の村の姿を記録する運動がありました。富士見市でも南畑村と水谷村の調査をまとめたものが残されています。震災の記憶も生々しい頃であり、具体的な数字が示されています。なお、原文は縦書きですが横書きにし、句読点を補ったり、漢字を新字体に替えたりしました。

『南畑村郷土調査』より

(六) 大正十二年九月の震災

東京に於ける発震時は九月一日午前十一時五十八分四十六秒六にして急激なる振動を感ずること数秒にして略南北に振動し更に東西に近き方向の激しき振動ありたり。こは相模灘海底の陥没にして糸魚川附近より松本平を経て甲州盆地に入る本邦中部を横断せる大断層線の一部として甲州谷村の北西笹子附近より南東に向ひ小田原附近を経て相模湾に入れる一地震帯の活動なり

本県に於ける被害

家屋の全潰	八〇七三		
同 半潰	五六四六		
死者	二一七名	傷者	五一七名

入間郡に於ける被害

全潰棟数	三九七		
半潰棟数	三〇〇		
死者	二名	傷者	一名

本県に於ては鉄道の被害最も多く大宮鉄道工場及び機関庫倒壊し卅余名の圧死者を出した外、常磐線土浦駅と荒川沖駅間に於て鉄橋進行中の列車八一四号が地震の為鉄橋と共に河川に落ち旅客中四十余名と機関手は即死し其の他三百余名の旅客は悉く重軽傷を負ふた等、其の惨状はいかばかりぞ。更に東南部の川口、蕨両町附近の工場の被害甚大にして織物業及鋳物業者の損害のみにて約三百二十余万円なりといふ。

本村の被害

本村は砂質壤土にして地盤緩きが故に本震によれる被害亦大なり

全潰棟数	約六〇
半潰棟数	約二三

其の他を合して約五万八千円の損害なり

『水谷村郷土調査』より

大正十二年関東地大震災

○被害

大正十二年九月一日午前十一時五十五分、突如大地震起り実に未曾有の大被害を起した。その被害左の如し。

倉庫二棟全潰 家屋土蔵壁破損するもの九十棟 屋根瓦墜落せるもの百十五軒

神社鳥居の倒壊五 石燈籠倒壊三対 墓石倒れしもの約三百八十個

掘抜井戸の破損数五 時計停止全部（以上は同年十二月の報告による）

村内に於ける被害は少きも本村出身者にして京浜方面に出で居るものの罹災者多数寄り来りその数左の如し

九月二十日現在滞在者

東京より二百五十名 横浜より八名 計二百五十八名なり

九月三十日現在滞在者

東京方面のもの二三五名 横浜方面のもの八名 計二四三名なり

十月十日現在滞在者

東京方面のもの一八八名 横浜方面のもの八名 計一九六名なり

小学校への臨時入学児童数は

九月 三十二人 十月 三十二人 十一月 二十二名 十二月 十六人 一月 十人

二月 十人 三月 九人

にして四月には皆帰復して居る。

○処産

本村としては九月中旬村内一般より義捐金を募り、十月二日入間郡長宛に金三百四十二円二十銭を納付したり。

十月十二日村内への避難民百七十八人に対する十三日人分一人金二十銭の割、計四百六十二円八十銭を、県知事へ宛、交付の請求をなし之を受領配給す。

村内各種団体に於ては左記事業を行ひたり。

軍人分会

村内有志者より義捐金を募り金二百七十二(円)の寄附を得、東京市救済のため金百円を寄贈し、村内避難民二百五十七名に対し、一名金五十銭、手拭一品、内甚しく境遇困難なるものに衣類を贈呈し、震災死亡者五人には香花料各一人一円を供し、倒壊家屋被害者には見舞金一人一円計三円を、避難児童にし(て)本村小学校に入学せし三十三名に対し学用品を贈りたり。

青年団

村内より甘藷六十二俵、大根十俵、金二十円の寄附を募り、九月十日、東京罹災民救助のため、浦和町停車場に於て県係員に引渡す。九月十七日、村内避難民二百二十九名に対し白米五合宛贈呈す。此の代金五十円四十八銭なり。

女子青年団

村内より寄附金若干を得、本村内への避難民二百十五名に対し慰問す。

即ち、避難民中百七十二名は、一人に対し手拭一、半紙二帖、慰問状一封。村内縁者死亡者六名に対し香花一個。避難児童三十七名に対し学用品を贈りたり。



ミニ展示

関東大震災と富士見

令和5年（2023）9月1日発行

富士見市立難波田城資料館
